

サハラの誘惑

砂漠を知ることなしに「砂漠化」が分かるのでしょうか。答えは「分かる」です。なぜでしょうか。それは、「砂漠化」が「砂漠の拡大ではなく、乾燥・半乾燥地域における土地の劣化」と定義されるためです。土地の劣化が分かれば「砂漠化」が分かるということなのです。

このような理屈はおいておくとして、私はとにかく砂漠を知りたかったのです。かつてチャドの行き帰りに何度も空から見たサハラ砂漠が忘れられなかったのがその理由です。夜行便で眠れぬまま窓から見下ろすと、砂漠であるはずの場所にところどころ明かりが灯っていました。「砂漠にも人が住んでいるのか」。以来、人が住んでいる砂漠を訪れることを想い続けたのです。

私の長年の想いが実現したのは、2009年でした。アルジェリアのサハラ・オアシス。そこには、サハラ砂漠の南縁に位置するサヘル世界とは一見かけ離れたなりわいと文化がありました。ところが通い続けて、人びとの話を聞いたり、ナツメヤシかんがい灌漑農業を見ているうちに、私の頭の中でサヘルとサハラがつながりはじめたのです。マリから来た農園労働者を祖先にもつ人びと、オアシスでも栽培されるトウジンビエなど、サヘルとサハラのさまざまなつながりが見えて

きました。

歴史的にサヘルとサハラは交易路によって結ばれていました。植民地として分割され、サハラ交易が分断され、人為的に引かれた境界を受け継いで多くの国が独立した、アフリカの現状を当たり前のもので受け入れてしまっていた私にとって、サハラはサヘルを違う角度から見る機会を与えてくれたのでした。

そんなことを考えながら、サハラ・オアシスに通いつめています。サハラ・オアシスにすっかり魅了されてしまったようです。

石山俊



写真①サハラ・オアシスで栽培されるトウジンビエ

